
さつきあめ

遼

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

さつきあめ

【コード】

N7072B

【作者名】

遼

【あらすじ】

転校初日に出会った、同じ名前の女の子。可愛くて、素直じゃなくて、どこまでも寂しがり。特別な日は、いつも雨だったと思う。

五月雨

出会ったのは、果てしなく広がる雨空の下だった。

五月雨

その小さな呟きとは対照的に、返答となる拍手はとても大きなものだった。これも転校生の宿命か、なんて考えれば諦めもつくが、こうして目立つのは甚だ不本意だ。目立ったところでいいことがあるとは思えないじゃないか、だって俺はあくまで「新参者」なんだから。目立ったり、活躍したり、そうやって出た杭を打つ分子は、こういった集団生活の中に必ず存在する。

俺が今まで重ねてきた転校生活で幾度となく経験してきた。苛め、なんて苛烈なものに発展することも何度かあったと思う。

だから俺は、目立つようなことをしたくなかった。暗くもなく明るくもなく、ただ集団の中に紛れていられれば、それで満足だった。

担任が手を打つと、拍手は疎らになつてやがて止んだ。多分この担任は、皆に慕われているんだろう。こういうクラスなら、ある程度は上手くやっつけていけそうだ。ある意味ではあるが、担任の性格や能力でクラスというものは見えてくる。無能な担任の下では無能しかできないし、下衆な担任の下には下衆しか集まらない。

「善い人」であれば、多少の忍耐力が必要。「悪い人」であれば、多少上手な処世術が必要になる。だから俺は、「普通」であり続けた。

いいじゃないか、普通で。

善いことをすると何が返ってくる？ 少しの礼と、多大なストレスだ。

悪いことをすると、何が返ってくる？ 少しの快感と、多大な罪と罰だ。

根っからの善人なんているわけがない。それから根っからの悪人も。誰もが表裏を持つてるし、誰もがそれを自覚して生きているはずだ。自分が善だとか悪だとか言ってる連中はきつと、ただ不器用なだけなんだと思う。そういう肩書きに縛られていれば安心で、個性を履き違えて、そうやってしか生きられないんだと思う。

そういう俺だって、こんな考え方だ。壮絶なまでに捻くれてる。偶然隣になつた「美羽さん」とやりに一言告げて、席についた。

少しのざわめきと担任の声が響くこの教室は、前の学校とは少しだけ勝手が違う。前は木の床だったし、机も椅子もそうだった。壁は安っぽい塗料に塗れ、黒板は粉だらけ。天井には長い電球がついていて、染みがそこかしこに見受けられていた。ここは違う。床は廊下と同じリノリウム。机や椅子は金属を白で塗ってある。逆に壁が木で、黒板の代わりにホワイトボード。天井は一面磨ガラスで、中に電球が幾つも入っているのか、過剰なほどに明るかった。

慣れない顔に、慣れない環境。

ここは酷く、落ち着かないところだ。

ホームルームは長くもなく短くもなく。無難に済ませた自己紹介

とは裏腹に、この担任は意外に自己顕示欲が強いようだった。連絡もほどほどに世間話に入り、次には担任の家庭の事情を無理矢理聴かされた。拷問もいいとこだ。

楽しんでる生徒が半数、寝ている生徒が何割か、呆れている生徒と、聴いていない生徒。しかしそれを嫌っている人間は、少なくとも俺以外にはいないようだった。

仕方なく慣れない教室を見渡していると、必然的ともいえだが、隣の席に目が行く。

可愛い人だ。円らかな瞳は前を克明に映すブラウンのビロード、髪の色はそれとよく似ている。細い眉はやや垂れ気味で、温和な人格を思わせた。横顔から見える鼻は小さく、しかし高い。唇は輝くような淡いピンク、血色のいいそれは、きっと柔らかくて温かいんだろうな。

見詰めていると、落ち着くんだ。そんな人。

「何か？」

ああ、そうだよな。俺が見詰められてたら、少なくともいい気分じゃない。

「いや、退屈で」

「それで？」

「君を見てた」

「退屈でしょう？」

「そうでもない」

正直な気持ちだ。美人は三日で飽きるというが、少なくとも十分程度でそうなることはないはずだ。

訝しげに俺を見た「美羽さん」は、一言だけ告げて前に向き直った。

「迷惑です」

ああそうだ。俺だって、見詰められたら迷惑だ。

苦笑したと同時に、担任の話はようやく終わった。

これは災難ととっていいのかそれとも喜ぶべきことなのか。或いは転校生の定めとでもいうのだろうか。今、六人の生徒に囲まれていた。男が二人に女が四人、男を囲むには些かバランスが悪いように思える。

親から授かった容姿は、少なくとも悪いものじゃないと思う。十七年間生きてきて告白されること二回、告白して成就すること、0回。果たして客観的に見てどうなのか、それは判断材料としては適当でなかったようだ。

「かつこいいよね、深雨くん」

「そう？ そんなこと、一度も言われたことないけど」

「そうなん？ あたし達、一気に好きになっちゃったけど」

「冗談やめてよ、調子に乗るから」

「あはは、乗れ乗れー。でもほんと、こいつらよりはずっとかつこいいよ」

そうやって口喧嘩になる男女は、きつと仲が良いんだろう。

俺だって話題に乗れないわけじゃない。楽しいとも思う。ただ、どこかでそれを意識してしまっているところがあって、でも決して俯瞰ではなくて、そう、意識的な無意識である、くらいが適当だろう。我ながらよくわからない性格をしている。

ここのクラスは美形が集まるようだ。世辞でなく、俺と今話している六人を見ればわかる。標本として優秀なのはわからないが、少なくとも六人集まって全員美形なクラスというのは今までになかった。

苦笑して、話に耳を傾ける。

「それで、前はどこにいたの？」

「東京」

「わ、都会モンだ。田舎へようこそ、びっくりしたっしょ？」

「すごくね。でもアスファルトより土の方が落ち着くよ」

「うまいなー、深雨くん。お姉さんご褒美に飴あげちゃおう」

「お、俺にくれよ」

「ばか、あんたはヤギ小屋の餌でも食ってるって」

「ひでえなー、こいつより俺のが長い付き合いだろ？」

ああ、いいね。この空気は、東京のそれよりずっと人らしい。

悪い学校じゃなかった、けどどこまでも愚かな学校だった。教師は事勿れ主義、それをいいことにやりたい放題の生徒達。“いい”生徒は半数で、残りは全部偏差値に縛られていたり遊びに煙草。教師も生徒も、良くも悪くも都会的だ。

ここはそう、皆ありのままに見える。少なくともこの六人は。

「背、高いよね。いくつ？」

「八十」

「たかー。じゃ、体重は？」

「六十五」

「すごいなー、理想的。私のこともらつてくれない？」

「俺じゃ釣り合わないよ、君みたいな人には」

「ははっ、こいつが？ ああそうか、確かに釣り合わん。こいつにお前は勿体無いわ」

「んだよお前、黙ってるよ！」

慎重に笑ってみる。ここは笑うところ、間違いない。

「あ、笑わないですよ。先生に言いつけちゃうぞ」

「なにそれ、京、似合わないーい」

「わ、私だってたまには可愛い子したいよ！」

「京さん？」

「あ、うん。御崎京」

「可愛いよ、心配しなくても」

「あ……うん、ありがと」

頬を染める京さんと、それをはやし立てる皆。別に他意があつて言つたわけじゃない、ただそれが口に出ただけだ。フォーでも世辞でもない、ただの本音。

完璧惚れたな、なんて言ってる女の子を笑って、手を振ってみる。「自己紹介まだだったね。あたし藤原早紀」

「私は田上知里」

「私は言ったね。御崎京」

「俺、田上諒。知里の双子の兄」

「僕は藤宮敏。あんまり会話に参加する方じゃないけど、よろしく」

「あ、わたし、如月有紀です……」

頷いて、見渡して、有紀さんに笑いかける。そうすると、無意識が告げる。

安心したように微笑んでくれた有紀さんに少しだけ安心して、俺も口を開いた。俺はここでやっていけるだろうという、微かな安堵と共に。

「俺、深雨皐月。皆、よろしく」

そういや自己紹介で名前言ってなかったな、なんて苦笑するのと、皆が驚いた表情をするのは、ほぼ同時だった。

午後から雨が降るそうだ。学校から大分離れたマンションの一室に、昨日ようやく備え付けたテレビでそう言っていた。

案の定、窓の外では大粒の雨が土を激しく叩いていた。

それでも、アスファルトより大分いい音だと思う。あの音は忙しなくて、何かに追い立てられているような気分になってくる。この音は多分、心を包み込んでくれるような、しとしとと、激しいはずの小さな音になる。

数学の授業を続ける担当教師の声は小さく掻き消され、代わりに生徒達の雑談が耳に入る。凡そが、傘を忘れた、みたいな内容だ。いくら午前中はからっと晴れていたとはいえ、この生徒達は天気予報を見る習慣すらないのだろうか。いくら田舎とはいえ、ここまでするとおめでたい。

そもそも家族が転勤なんてするからいけないんだ。だから俺はこの転勤で終わりにして、後はついていかないことを決めた。田舎暮らしも悪くないだろうし、何より汚い人付き合いにうんざりしていたところだ。マンションでの一人暮らし、そして家族との決別。意

外にあっさり済んだ。感慨深さは全体の二割、残りは清々するとい
う後腐れのなさだけだ。

窓の外は薄暗い雲、緑の妙に多い住宅街、そしてぼつぼつとある
田畑。

田舎もいとこだ。不便ではあるが、落ち着く。

ここよりずっと栄えた駅前、小さなマンション。そこが俺の住
処になった。八畳一間の、バストイレ、キッチン付き。家賃はこれ
で六万五千というんだから、田舎というのは信じられない。東京だ
ったら、九万はくだらないはずだ。

ため息一つ、ホワイトボードに目をやる。

生憎数学は得意じゃないんだ。東京の学校じゃ文系に進んだし、
理解してやる必要なんてこれっぽちもありゃしない。シグマだとか
微積だとか、そもそも人間の使える言語じゃない。

ともあれテストには通らなくちゃいけない。仕方なくノートに向
かうと、消しゴムが落ちた。やれやれ、落ちこぼれは何もかもを落
とすもんか？

「はい」

「あ？」

「けしごむ」

「あ、ありがとう」

「ちゃんと授業受けた方がいいですよ」

美羽さんはそう言って、俺の机に消しゴムを置いた。

これからやるうとしてたよ。なんてことを、いつもの俺だったら
言うだろう。でも……彼女がそう言うなら、そうした方がいいのだ
ろう。母親の忠言を聞くように、俺は無言で机に向かった。

下校時間になると、教室よりも廊下が賑やかになる。こういった、
傘を忘れがちな雨の日は尚更だ。

一人、三階から一階へ向かう。あの六人とは教室で別れて、一人
で帰ると言っている。どうやら俺の学校生活は、あのグループに縛

られていきそうだ。まああの集団なら問題はない、叩かれているタイプでもなさそうだし。

打算的な付き合いになる。東京という街は、少なくともそうだった。

変わるか、変わるか、それとも変わらされるか。いずれにしても、悪い気分じゃない。この処世術は失くさなくていいと思うけど、ここでの付き合い方も学んでおきたい。

下駄箱には、傘を持たない生徒が多くいた。内心せせら笑いながら上履き　　そういえば東京じゃスリッパだったな　　を履き替え、傘立てから自分の傘を持って外に出る。ああ無用心だった、傘つてのは自転車よりずっと盗まれやすいんだった。よかった、あつて。

傘を開くと同時に、隣に気付く。

「美羽、さん」

「……何か？」

「傘は？」

「見てわかるでしょう」

「帰り道、どっち？」

「教える義理はないです」

そりゃそうか。

「俺はあっち。駅前の方」

「私もです」

「じゃ、入ってきな」

少しだけ黙った美羽さんは、顎に手をやって考え出した。何をしたものか、何を言ったものか、こつちまで考えていると、美羽さんは鞆を開けて何かを探し始めている。

「あなた、臯月さんとか言いましたね」

「うん。深雨臯月」

「私もです」

「はい？」

「名前。美羽五月といいます」

「あら」

美羽って、名前だと思ってた。

「それから」

ようやく鞆から目を離し、“それ”を開いて小さく笑った。悪戯の成功したような、可憐な少女らしい笑顔だった。

「折り畳み傘、持ってますから」

ああそりゃそうだ、傘持ってるなら必要ないな。

苦笑しながら、美羽さんの後について校門を出るのだった。

続く

入梅は遅くにやってくる

「知ってますか？ 私、結婚しても苗字変わらないんですよ」

入梅は遅くにやってくる

「どんな魔法使ったわけ？ こんな美羽さん初めて見た」

俺の部屋に来て勉強会を始め、十分後のことだった。京はキツチンに立つ五月を見て、感心そうにため息をついた。どういうわけかため息の色が少しだけ濁ってた気はするけど、特に気にするほどのことじゃない、と判断してみた。それに、有紀の様子もおかしい。中間テストが近い。勉強をしようと言ってきたのは、隣の部屋に住む五月だった。それでどういうわけか、このメンバーが集まってしまったというわけだ。俺だって五月と二人きりは悪くないだろうと思ってけど、生憎そんなシチュエーションには慣れなかった。だからせめて仲介役にと後腐れなさそうな早紀を呼んだのがそもそも間違いだっただ。

さつきあめ

こいつらの連絡網を侮っていた。どうせならと早紀が京と有紀に電話をしたら、後はあつという間。京から知里、それから兄の諒に伝わり、当然のように敏にも連絡が繋がった。どうしてこうも連帯感が強いんだか、甚だ疑問だ。これでドライな関係じゃないっていうのだから信じられない。

後は予想通り。皆は騒ぎ、五月は一人不機嫌だった。

「どしたー？ 私質問してるよー？」

「いや、魔法なんて使ってない。お隣さんのご縁ってただだよ」

「お隣さん、ね。美羽さん、すっかり立ち姿が堂に入ってるよ」

キッチンに立つ五月は、確かにそこにあるのが当然のようだ。もう何年もここに住んでるような錯覚すら覚える。実際隣なんだから部屋の中身は同じだけど、こうも……

ああいかん、雑念は捨てるんだ。五月だって、この部屋に通うのは不本意なんだから。

「あたし、手伝おうか？」

「結構です。あなた方は臯月さんに勉強を」

「そう……？ 美羽ちゃんも、早くね」

「すみません、藤原さん」

おやつ準備、らしい。小さな身体をせつせと動かして、生地を色々な形に切り抜いている。趣味からか、クッキーの抜き型はたくさん持っているらしい。中でもお気に入り、星型だって話だ。

後は焼いておしまい。早く混ぜればいいのに、五月は「今度はお茶の準備を」と言っただけで聞かなかつた。そんなに混ざりたくないか、なんて思って苦笑してみた。元々人付き合いが得意な五月じゃない、多分だけど、照れてるんだ。

つくづく可愛い人だ。俺は、多分こんなところに惚れたんだと思う。

俺、深雨臯月は、漢字が違うだけの同姓同名、美羽五月に恋をしていた。

自覚したのは、そう遠い昔じゃない。出会った日に一緒に帰り、

そこで同じマンションの隣の部屋だと知った。それから何度か通いつめて、いつしか逆に五月からウチに通うようになった。その頃からだ。五月は余りに、そう、可愛すぎた。

それに、捻くれた俺でも、この子の言うことだけは不思議と逆らう気が起きなかった。或いは母親よりずっと母親らしい存在だ。この勉強会だって、五月じゃなかったら断ってた。

背中を見詰めて、ため息一つ。やっぱり早紀を呼ぶのは止めとけばよかった。

「どうしたんです？ 早く解かないと……」

「ああ、ありがと、有紀。ここ、教えてくれるかな」

「あ、はい、そこは……」

とはいっても、いつまでもそんなことを引きずってるわけにもいかない。せつかく来てくれたんだし、何より有紀が俺の部屋に入ったということが奇跡的だ。

キッチンからため息が聞こえたのは、有紀の協力で難問を一つ解き終えた時だった。

「臯月さん、勉強は進みました？」

どの口がそんなことを、と不貞腐れてみると、逆に五月が黙ってしまった。

確かに勉強会は大成功、俺の苦手な数学もある程度は克服されたと思う。主に有紀の手柄だ。彼女の教養は深く、大人数を相手にする教師よりもずっとわかりよかった。

でも、五月が一番だ。彼女の言うことは、いちいち頭に染み込んでくる。

「そんなに黙らないでください……」

「五月が悪いんだろ。結局、一度も口を利かなかったじゃないか」

「だって、」

「だって？」

「仲良し、だったから」

頬を膨らませて、五月は俺を上目遣いに見詰めた。抗議の視線を受けて逆に微笑ましくなるのは、きつと五月がこんなにも可愛らしいからだと思う。

以前ならこうして抗議の視線すら向けてはくれなかった。ただ無言で主張するのだ。

「臆月さんだって、私を見てくれませんでした」

「見てたよ、ずっと」

「嘘です」

「嘘じゃない」

「嘘」

「違う」

「……嘘、です」

流石に苦しくなったのか、俯いてしまった。俺も言い過ぎたかな、と反省していると、五月は次の瞬間顔を上げていた。ぼろぼろと大粒の涙を、少しずつ零して。

「ふえ、だって臆月さん、だって……」

「あ、ああ、悪かった。ほら、勝手に友達誘って悪かったよ。な、泣き止んで」

「うええ、だって、皆楽しそうだ、つたから、だから、」

頑なに見えた鎧のような態度は、実はとても簡単に剥がれるメッキだった。五月がここに通うようになってから、五月はことあるごとに涙を流した。例えば俺がコンビニに行つてしばらく帰つてこない、一人で泣いている。駅前ですら、コンビニは二キロも先にあるつてだけなのに。

寂しがりやだ。それも極度の。学校ではそれを隠すうちに人との付き合い方を忘れていたんだと思う。俺は望んで一人暮らし、でも五月はずつと家族と暮らしていたかつたんだ。

そこに俺みたいなの、お節介がやってきた。メッキは実に簡単に剥がれた。

「臆月さん、楽しそうで、だから、」

「お前、なあ……………」

「ふえ……………」

「お前が俺と口利いてくれなくて、俺がどれだけ寂しかったか、わかんなかったか？」

「……………言ってくれないとわかんないです」

随分勝手なことを。無言で五月の頭に拳骨を落とすと、五月はますます大きな声で泣き出してしまった。ああ失敗した、五月は怒られるのが苦手なんだ。衝動のままに生きてたら、きつと五月とは一緒になれない。まさか東京で培った少し汚い処世術が、恋愛関係に役立つとは思ってもなかった。

どうするべきか、なんて考えたら答えはすぐに出てきた。五月は家族に飢えているから、

「……………何です？」

「頭撫でてる。可愛いから」

「……………めいわくです」

「そうか」

「めいわくなんですよ」

「うん」

「……………もう少しだけ、ですよ」

「そうだな」

五月は目を閉じて頬を少しだけ緩ませた。それは見て取れるような笑顔ではないけれど、確かに微笑んでいるんだと思う。

五月は泣き止むと大抵いつもの五月に戻ってる。剥がれたメツキを一生懸命塗りなおしてるんだろう。そんなことしたって、どうせすぐに剥がれてしまうのに。もう、メツキなんて塗りこまなくていいのに。俺が、ありのままの五月を好きなように、五月も、ありのままの自分を好きになっただけくれたらいいのに。

でも多分そうなら、俺は下らない嫉妬を抱くんだろう。誰にでもこんな無防備な姿を晒してしまう五月を、少しだけ責めてしまっただろう。この子に対してだけ抱く感情が、独占欲だった。五月

はずつと俺の前で泣いてくれたら、そう思う。

五月の部屋は、酷く殺風景だ。いつぞやか漫画で見た、あの部屋のような、最低限の家具もないような部屋。お金がないんだそう。家族は旅行に出かけたわけでも赴任したわけでもない。事故で亡くなった。だから、最低限暮らしておくお金しかないそう。

同情するなら金をくれ、ってセリフがどこかのドラマであったと思う。確かに世の中金だ。五月だって、金があればこうはならなかった。でもきつとそんなことを言える人間というのは、同情の意味を履き違えてる。俺だって五月に同情なんてできないし、ましてホームレスの女の子に同情することなんてできるわけがない。同じ立場に立って、同じ感情を共有するのが同情だ。そんなことできる人間を切り捨てられるはずがないし、こっちだってそんな境遇に同情するくらいだったら金をくれてやる。

ああもう、だからこの子は大変なんだ。同情できない立場っていうのは、どうしても厄介になる。

「五月は、好きなひと、いるか？」

「います」

「訊いていいか？」

「どうぞ」

「……誰？」

「家族です」

ああそうか、そりやそうだ。いなくなるうとどうしようかと、好きな人が家族でないわけがない。

求めてた答えと違って、それはあるべき答えだったんだろう。

「知ってますか？ 私、結婚しても苗字変わらないんですよ」

初めてのキスは、クッキーよりもずっと甘かった。

学校は中間テストに入り、慌しさを増した。本来なら、というより東京だったら皆逆に落ち着いていたものだ。諦め、もしくは余裕のどちらかだった。

ここは足掻く連中が多い。固めた土台が脆すぎる、ということだろう。或いは土台に気付いていない、ってところだろうか。授業や自習で培った部分しか、発揮できない。これは当然の帰結で、テスト前に少し齧った程度の知識なんて、結局何の役にも立たないのだ。それをわかりすぎるほどわかっているのは、きつと模試なんかに縛られていたからだと思う。

でもここの方がよっぽど人間的だ。人間というのは、危機に瀕して足掻くものだから。

「臯月さん、余裕ですわね」

「ああ、もう何やっても無駄だし。五月こそ、もう教科書しまつてるじゃないか」

「余裕です」

「だよ。諦めと余裕は違うよね」

「諦めてるんですか？ 今、少しやっておきます？」

「……そうだな、やっておこう」

やっぱり、五月の言うことには逆らえない。固めた諦念や観念すらも、簡単に崩される。足掻いたって無駄なんだって、わかっているのに。

でもどうせならだ。郷に入っては郷に従え、って、よく言うじゃないか。

それにこうやって顔を近づけて甘い香りに包まれながらの勉強っていうのも、悪くない。横顔は変わらない、可憐な少女。小さな身体と、小さな唇。ああいけない、意識したら勉強に身が入らない。

でもこの唇が俺のモノになったって思ったら、居ても立ってもいられないんだ。今すぐにでも今ここで、奪ってしまいたいと思う。

そんなことはしない。目立てば打たれる杭に、なりたくないから。わかります？」

「少しね。五月、教えるの上手いから」

「褒めても何も出ません」

「顔、赤い」

「知りません」

「可愛い」

「し、しりません」

ほら、でも俺達立派なバカップル。

五月は、その容姿からこの学校内でも目立つ方らしい。頑なな態度が邪魔をして仲の良い男はいないものの、狙っている男自体は多いとか聞いたことがある。諒から聞いた話だ。

だから俺みたくない男は、嫉妬とかぶつけられるんだろう。

それも悪くない。或いはそれも、ステータスになるだろう。

平凡でありたいと願った男は、たった一人の女に溺れてしまった。だって五月が悪いんだ、こんなにも可愛いから。照れて顔を赤くして、俺にだけ泣き顔を見せてくれる五月は、出会ったあの日のような笑顔を見せてくれたことはない。いつかは、と思う。

有紀と京。もういい、わかっただろ？

「五月」

「どうしました？」

「五月が笑ったら、あの二人をふるうと思う」

「……気付いてたんですか？」

「勉強会の後、少しね」

少しだけ俯いて、五月は口の端を持ち上げた。

「はははっ、五月、なにそれ！」

「な、なんでもないです。ちよっと……口がかゆかったんです」

下手な言い訳に思わず吹き出して、俺は何十秒も声を上げて笑った。

少し不機嫌な五月に、周囲の訝しげな視線。それと、京と有紀から感じる視線。どれを見ていようかなんて、答案の見えたテストより簡単だった。

その後俺が二人の女を泣かせたことは、心の奥に留めておこうと誓うのだった。

夏休みに入る少し前に、五月は女になった。

俺の部屋の小さな布団の中で、二人で息を合わせている。

「つ、疲れました」

「汗、かいたな」

「痛かったです」

「血、シートについたな」

「うれしい、です」

「泣いてるぞ、五月」

親指で涙を拭って、その指を口に含んでみた。慌てて俺の腕を引っ張った五月の顔は、これ以上ないくらいに紅潮している。笑って抱きしめた。苦しそうに呻いた五月は、その後嬉しそうに喘いだ。小さく上下する小さな胸が、俺と五月の間で潰れて形を変えた。

温かい。何が、とか、どこが、とかはなくて、ただ温かい。それでもその熱は漠然としたものでなく、はっきりと俺の胸の中に残っていた。

胸の中で嗚咽する五月は、何を想っているだろう。今は亡き両親だろうか。それとも、俺がふったあの二人のことだろうか。許してくれた二人のことだろうか。或いは、俺のこと、自分のこと。もしかしたら、初めてが痛すぎたのかも知れない。

「うれしい、です。本当に、うれしい……」

「そうだなあ。泣き虫五月は、嬉しくても泣くんだなあ」

「だって、うれしくて。私、臯月さんと、」

見上げた瞳は、少しだけ赤くなっていた。

「家族になっただんです」

「五月は、可愛いな」

「かぞく、です」

「五月、寂しがり」

「か、あ、あう……か、かぞく……」

一度だけ唇を重ねて、後は五月に任せることにした。自己完結してくれ。

まどろむ意識の中で、五月は一度だけ笑っていた。

この度俺達、結婚することになりました。

両親にしこたま怒られて、泣かれて、笑われた。

だって五月が可愛いから。

お腹を撫でながら微笑む五月の部屋は、もうなくなってしまった。

「雨、ですね」

「そうだなー」

「……今年の五月は余り降りませんでした」

「うん」

「あの日私が傘を持ってなかったら、何か変わってたでしょうか」

「相合傘、してたかな」

「どうです？」

「お前にしか、わからないよ」

「追いかけてくれて、ありがとうございました」

「ああ」

「おかげであなたを好きになれました」

「うん」

「家族をくれました」

「大事にしような」

「はい」

「あの日が雨でよかった」

「今日も雨です」

「特別な日は、全部雨だ」

「梅雨、ですから」

「遅いなー、梅雨入り」

「はい」

「もう、九月だ」

「就活、頑張ってください」

「大学、結局行き損ねた」

「家族を養うのは、お父さんの責任です」

「雨、強いな」

「はい。梅雨ですから」

高校で結婚して、高卒で就職して、それは大変な道なんだろうけど、ああ大丈夫だ。

五月雨が泣く日に出会って、入梅と同時に結ばれた。

この日もやっぱり、雨が降っている。午前中はずっとからっと晴れていて、そこに傘を持ってきてる人は全然いなかった。

ああそりゃそうだ。

「迎えに行くよ」

「はい」

「帰る場所は同じです」

「じゃ、入ってきな」

そりゃそうだ、傘持ってなきゃ、三人で入るしかないよな。

笑いながら並んで歩く二人と、その腕が抱く小さな一人を、雨はいつまでも強いまま、その音で包み込んでいた。

さつきあめ

入梅は遅くにやってくる(後書き)

変態ちゃうわっ

主張する必要は余りないと思います。

さつきあめ

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7072b/>

さつきあめ

2008年11月7日08時50分発行